

大学院派遣研修での研究内容の概要

所 属 校	東京都立小平高等学校	氏 名	柴田 祥彦
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	学校教育専攻・国際教育コース
研究テーマ	生徒たちの「気づき」に焦点をおいた 地理Aにおける国際理解教育の実践事例研究		
<p>1 研究の目的（学校における現状、課題、課題を解決するための研究の位置づけ）</p> <p>1996年7月中央教育審議会第一次答申では「国際理解教育は、各教科、道徳、特別活動などのいずれを問わず推進されるべきもの」とされている。現代の世界を学習の対象とする地理も、諸外国の生活・文化や地域の地理的な情報を取り扱うことを通じて国際理解教育の一端を担ってきた。とりわけ1989年に地理歴史科と共に新設された地理Aは、異文化理解と地球的課題という二大テーマを主題学習的に扱うことを特色としているため、それまで以上に国際理解教育により近接した内容を扱うようになったといえるだろう。</p> <p>これまでも地理Aの学習を通じて様々な国際理解教育の実践が行われてきた。一般的なものとしては、留学生などの外国人が教室にやってきて外国事情について講演を行うものや、生徒たちと民族音楽・衣装・料理などを通じて交流するといったものが多かった。このような特別授業を実施するには、教科担当者の並々ならぬ努力が必要であったことは想像に難くないし、また生徒たちにしても、普段の授業よりも楽しくまた得るものも多かったことが実践の感想文からうかがい知ることができる。しかし筆者は、このようなイベント的な国際理解教育に一定の効果があることは認めるものの、何か物足りなさを感じていたのも事実である。しかしそれに対しての代案を出せるまでには至らなかった。</p> <p>そこで本研究では、地理教育を通じた国際理解教育の目標とその指導方法を提示するとともに、その実践事例からその妥当性を評価することを目的とした。</p>			
<p>2 研究内容（方法・経緯・内容等）</p> <p>「公民的な資質」に焦点をおいて地理教育を俯瞰してみると、社会科地理の時代から現在の地理歴史科地理の時代に至るまで、知的側面に加え態度的な側面をも含む、「公民的な資質」を積極的に追求すべきだという立場と、「公民的な資質」を追求することの意義は認めるものの、地理教育においては地理教育にしかできないことを追求すべきであり、また、正しい知識を授ければ自ずと行動は伴うものだという立場とに、大きく二分することができる。</p> <p>一方戦後、ユネスコを中心に推進されてきた日本の国際理解教育は、1974年のユネスコ教育勧告を経て、その内容を他国理解などを中心としたものから、より広範なものへ、そして知識理解にとどまるのではなく、態度化・行動化までもが目指されるようになった。</p> <p>筆者は、地理教育を通じて、地理的知識だけではなく、生徒たちの人格形成につながるものを提供しなければならないと考える。その立場に立って地理教育と国際理解教育を重ね合わせてみると、両者の重なる部分が多いこと、とりわけ、1989年に新設された地理Aは異文化理解と地球的課題という二大テーマを扱っていることから、国際理解教育と重なる部分は極めて大きいことがわかる。つまり、地理Aを通じて国際理解教育を推進していくことが極めて妥</p>			

当であると考えられるのである。

そこで筆者は、地理教育を通じた国際理解教育の目標を「将来の主体的な社会参加」と位置づけ、地理Aの授業を通じて規定した目標につながる力を生徒たちに身につけさせたいと考えた。

真に主体的であるためには、権力性を背景にした力によるでは権力による監視の範疇から抜け出た際に効力がない。そこで、主体的な行動の動機が外発的なものではなく、内発的なものでなければならないと考えたため、具体的な体験を通じた生徒たちの「気づき」に焦点をおいて授業を組み立てることとした。また、将来の社会参加には正しい知識と、それを用いて価値判断・意志決定する力が必要であると考えたため、この両者を包括する学習形態である参加型学習を授業に取り入れることとした。

以上のような考えを基盤として地理Aの年間指導計画を作成し、それを筆者が勤務する東京都立小平高等学校の授業において2004年4月から実践を行った。

実践内容は、「貿易ゲーム」「南アフリカ・ディマカツィオさんの出稼ぎについてのディベート」「写真集『地球家族』を用いた『豊かさ』を考えさせる授業」、そしてそれにつながるための「あなたにとって?!”な写真」、「ホームステイにいらっしやい」といった参加型 Activity である。

本研究は、その授業実践内容の報告をするとともに、毎回授業で生徒たちに書いてもらった「ふりかえりシート」やレポートの内容をもとに、単元毎の設定目標への生徒の到達度を計り、授業内容や指導方法の検証を行ったものである。

3 研究成果と課題

検証の結果、生徒たちは、参加型学習を通じた様々なことに対する「気づき」から、多面的にものごとを見ることの重要性や、多様な価値観の存在を認識できたこと。また、「気づき」をきっかけとしてさらなる興味・関心が引き出されたケースがあったこと。そして、調べ学習の中で自分の中にあった他国に対する偏見に「気づき」、他国イメージの自己更新をはかれた生徒が多数いたこと。以上のような事実から、実践を通じて所定の目的を達成することができたと判断することができた。

今後の課題としては、今回は生徒の感想文を中心に分析を行ったが、感想文を用いての成果の検証が果たして真に妥当であったのかについて十分に考察することができなかった。授業における生徒の内面の変化を分析は、心理学や様々な学問分野からのアプローチがなされているが、日々の授業と繁忙な校務に追われる現場の教員に、他分野までの研究は事実上不可能であろう。そこで、限りなく主観を排した授業評価の方法について考察したのではあるが、結論を出すまでには至らなかった。

また、確かな知識を注入するわけではない参加型学習に対して、どのような手法を用いて、どのような評価をすべきなのかといった問題も十分に考察することができなかった。

大学院派遣研修成果活用状況

所 属 校	東京都立小平高等学校	氏 名	柴田 祥彦
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	学校教育専攻・国際教育コース
研究テーマ	生徒たちの「気づき」に焦点をおいた 地理Aにおける国際理解教育の実践事例研究		
1 所属校での成果活用	<p>① 地理Aの授業において、大学院派遣研修を通じて開発した指導案を改良し実践している。とりわけ普通科外国語コースの地理においては、国際理解教育に焦点をおいたカリキュラムを作製し、実践している。</p> <p>② 大学院で知り合った外国人留学生（現職教員）を学校に招き、生徒たちとの交流会を年二回実施した。</p> <p>③ 派遣研修中に研究した国際理解教育を生かし、学校長の学校経営計画に寄与するため、海外からの修学旅行生徒、JICA 青年招聘事業（タイ・農業）を受入、生徒たちとの交流会を実施した。</p> <p>④ 参加型学習の手法を総合的な学習の時間（国際理解としての地理）にも生かし、生徒たちの視野を広げると共に、多様な価値観を共有することができた。</p> <p>⑤ 授業公開を年に三回ほど実施し、校内研修の充実に貢献した。</p>		
2 委員会・研修会での成果活用	<p>① 全国地理教育研究会・東京日大文理大会（2005年8月）において、大学院派遣期間中に作製した指導案の実践事例を研究発表した。</p> <p>② 全国地理教育研究会の機関誌『地理の広場』において、大学院派遣期間中に作製した指導案の実践事例を誌上発表した。</p> <p>③ カリキュラム学会・東京学芸大学大会（2005年6月）において、大学院派遣期間中に作製した指導案の実践事例を研究発表した。</p>		

<p>3 成果を生かした研究授業等</p>	<p>① 東京都教職員研修センター主催、2005（平成 17）年度キャリアアップ研修「社会Ⅲ」の授業研究を 9 月 29 日に実施し、参加型学習のそのノウハウを他校の先生方に披露すると共に、その後の研究協議会での議論を通じてその普及に貢献した。</p> <p>② 3 月 2 日 東京都地理教育研究会主催の公開授業を行う予定。内容は持続可能な開発のための十年と環境教育、地理教育の接点を意識した授業を予定している。</p>
<p>4 今後の活用計画等</p>	<p>① より良い授業を行えるよう、研修を充実させていきたい。</p> <p>② 学校経営計画にも盛り込まれている、国際交流・国際理解教育を推進していく。</p> <p>③ 全国地理教育研究会の大会で、授業実践を報告していく。</p>

「写真集『地球家族』を用いた地理 A における国際理解教育の授業」

平成 17 年 9 月 29 日 (木)

東京都立小平高等学校 柴田 祥彦

1. 日時 平成 17 年 9 月 29 日 木曜日 5～6 時限 13 時 20 分～15 時 10 分

2. 学級 普通科外国語コース 1 年 F 組 男子 7 名、女子 32 名 合計 39 名

3. 学級の様子
省略

4. 年間学習指導計画

	授業形式・内容	学習指導要領での位置づけ	評価方法
1 学期 前半	《講義形式》 人種・民族 宗教 国家 交通・通信 時差 図法	(1) 現代世界の特色と地理的技能 ア 球面上の世界と地域構成 イ 結び付く現代世界	ペーパー テスト
1 学期 後半	《参加型学習》 貿易ゲーム (2 時間) ディベート (6 時間)	イ 結び付く現代世界 ウ 多様さを増す人間行動の 現代世界	Portfolio 形式のレポ ート
2 学期 前半	《参加型学習》 豊かさランキング (2 時 間) ホームステイにいらっ しゃい (6 時間)	(2) 地域性を踏まえてとらえる 現代世界の課題 ア 世界の生活・文化の地理的考察 (ア) 諸地域の生活・文化の地理的考察	Portfolio 形式のレポ ート
2 学期 後半	《講義形式》 地形・気候と人間生活	(ア) 諸地域の生活・文化の地理的考察	ペーパー テスト
3 学期	《講義形式》 近隣諸国の地誌 環境問題	イ 地球的課題の地理的考察 (ア) 諸地域から見た地球的課題 (イ) 近隣諸国や日本が取り組む 地球的課題と国際協力	ペーパー テスト

5. 単元の計画

時間	月 日	内 容
1	9月13日	グループでの話し合いを円滑にするため、ニュースランキングを行った。
2,3	9月27日	本時 「豊かさ」ランキング
4,5	10月6日	途上国のホストファミリーになったつもりで、我が家にホームステイにいらっしやいと小平高校生に対してプレゼンテーションを行うという授業の趣旨説明、国の選定。
6,7	10月13日	自分たちのグループが発表する国について調べ学習。
8,9	10月20日	7～8グループがそれぞれ10分でプレゼンテーションを実施する。→ 中間考査は行わず、評価はプレゼンテーションの中身と調べた国についてのPortfolio形式のレポートで行う予定。

6. 本時のねらい

- ① 世界の諸地域の生活・文化を、主体的な学習方法を通じて獲得させる。
- ② 写真集や統計資料など、様々な「ものさし」を読みこなすことを通じて世界の格差に気づかせる。
- ③ グループワークを通じて、多様な視点（「ものさし」）に気づくと同時に、ものごとを多面的にとらえることの重要性に気づかせる。

7. 使用する教材・写真集

教科書 『高等学校 地理A』 第一学習社
 地図帳 『新詳高等地図 最新版』 帝国書院
 資料集 『最新地理図表 GEO』 第一学習社
 写真集 『地球家族』 ピーターメンツェルら著 TOTO 出版

8. 本時の指導案

1時間目（13:20～14:10）の指導案

学 習 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
授業内容の説明 登場する国の位置の確認する	2時間の授業の大まかな内容を説明する。 エチオピア、クウェート、アルバニア、メキシコ、の位置を地図帳で確認する。	プリントを配布する。
個人で「豊かさ」ランキングをつける	エチオピア、クウェート、アルバニア、メキシコ、日本の5ヶ国の家族の写真を見て、「豊かだ」と思う順に並べると同時に、「豊かさ」を測るときに用いた指標・「ものさし」も明記する。	適宜机間巡回する。

グループで「豊かさ」ランキングをつける	グループで各自のランキングを発表した後、グループとしてのランキングと、その時用いた「ものさし」を話し合って決める。	適宜机間巡回し、話し合いを促進させる。
グループランキングを黒板に書く	各グループの板書担当者は、グループランキングを黒板に書く。	「ものさし」は後で発表してもらうため書かない。
グループランキングの「ものさし」を説明する	各グループの発表担当者は、「豊かさ」を測った「ものさし」と、グループでの議論のおおまかな内容を説明する。	生徒の言を教師がまとめて板書する。
授業のふりかえり	この授業で気づいたことなどをプリントに記入させる。	簡単な文章にまとめさせる。

2時間目（14:20～15:10）の指導案

学 習 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
統計データから「豊かさ」を考える	課題①、②を通じて「豊かさ」ランキングで取り上げた国を、統計データをグラフ化することなどによって解析する。	適宜机間巡回する。
ゲトゥさんの言葉を考える。	これほどの格差がありながらも、エチオピアのゲトゥさんは今の暮らしに対して「豊かでも貧しくもない。借地農家としては中くらい。毎日やっつの生活だが、生きていける」と答えている。このことをどうとらえたらよいのか。本人が満足しているのだから、援助などしなくて良いのではないか？	自発的に答えなければ、数名の生徒を指名して答えてもらう。
BHNとは何か？	BHNについて解説し、エチオピアのゲトゥさんの暮らしはBHNを満たしていないことを理解する。	
UNDPの考える「豊かな」生活に必要なもの	国連開発計画が人間開発報告書の中で述べている「豊かな」生活に不可欠な6つの要素を生徒と共に考えていく。	
授業のふりかえり	この授業で気づいたことなどをプリントに記入させる。	簡単な文章にまとめさせる。